

### 第三章 光る源氏の物語 新旧後宮女性の動向

#### [第一段 花散里訪問]

かく、この御心とりたまふほどに(このように正夫人の御機嫌を取っていなさると)、花散里などを\*離れ果てたまひぬるこそ(花散里などの院外の女たちを帰京後まだ一度も訪れていらっしやらなかったという事が)、いとほしけれ(光君にはとても気掛かりに思えて来たので御座います)。公事も繁く(おほやけごともしげく、仕事も忙しく)、所狭き御身に(ところせきおんみに、政府首脳なので警護も厚く気軽にお出掛けできない御立場でしたので)、思し憚るに添へても(自重されるのに加えて)、めづらしく御目おどろくことのなきほど(馴染みの女たちは取り立てて目新しい事が有る相手でもない)、思ひしづめたまふなめり(光君はゆっくりと構えて御出でなのでした)。\*帰京早々には光君は二条院の女たちを可愛がるのに手一杯で「御いとまなくて他歩きもしたまはず」と既述されていた。

五月雨つれづれなるころ(さみだれがポツリポツリと降る頃)、公私(おほやけわたくし)もの静かなるに、思し起こして渡りたまへり(公私共に余暇の出来た時に思い立ってお出掛けなさいました)。よそながらも、明け暮れにつけて、よろづに思しやり訪らひきこえたまふを(光君は実際にお見えに成らなくても生活面では常に何かと御世話申し為されているのを)頼みにて、過ぐいたまふ所なれば(頼みにして暮らしている姉妹の家でしたので)、今めかしう心にくきさまに、そばみ恨みたまふべきならねば(今が如何というような思わせぶりな僻み言を言い立て為さりはしませんので)、心やすげなり(光君は安心なさったようでした)。年ごろに(というのも光君が流離したこの数年で)、いよいよ荒れまさり、すごげにておはす(邸はますます荒れて来て寂れた暮らしぶりでしたので、他に頼る男が居ないのが分かったからなのです)。

女御の君に御物語聞こえたまひて(父帝の女御であった姉君の処で先ずは御話し申しなさってから)、西の妻戸に夜更かして立ち寄りたまへり(妹君のいる西殿の戸口には夜が更けてからお立ち寄りに成りました)。月おぼろにさし入りて(月の光りを臙に受けて)、いとど艶なる御ふるまひ(何とも優雅にお入り為さる)、尽きもせず見えたまふ(弥が上にも美しいお姿でした)。

いとどつつましけれど(ごく控えめに)、端近ううち眺めたまひけるさまながら(軒先近くの縁側で心許なさそうでは有りながら)、のどやかにてものしたまふけはひ(のんびりして御出での様子の妹君は)、いとめやすし(光君にもとても穏やかに感じられました)。\*水鶏(くひな)のいと近う鳴きたるを、\*クイナは体長 25cm ほどの地味な渡り鳥ないし留鳥で、湿地を歩いて生活し滅多に飛ばず、臙病なので直ぐ草陰に隠れるらしい。またクイナにはツル目クイナ科の同種ながら、主に北方で繁殖し越冬で南下する冬鳥のクイナと、主に南方で繁殖し避暑で北上する夏鳥のヒクイナがいるそうで、戸を叩くように次第に速く鳴くのはヒクイナの方という事で、成る程この場面の設定も五月の夏である。

「水鶏だにおどろかさずは、いかにして荒れたる宿に月を入れまし」(和歌 14-09)

「クイナが知らせてくれたので、荒れ屋にも月を迎えます」(意識 14-09)

\*注に<花散里の贈歌。「だに」副助詞、最小限の期待。せめて一だけでも。「月」は源氏を喩える。「まし」仮想の助動詞。水鶏が鳴いて教えてくれたから、あなたを招じいれたのです、の意。>とある。当歌をもう少し逐語に言い換えれば、「水鶏が鳴いて教えてくれ無かったなら、どうしてこんな荒れ家に月のように美しく照る貴方を招き入れられたのでしょうか」と言う相当に謙虚な趣である。

と、いとなつかしう、言ひ消ちたまへるぞ(と花散里の妹君がとても懐かしげに語尾が消え入りそうに仰るのを)、「\*とりどりに(鳥の鳴き声に洒落るとは実に奥ゆかしく色取り取りに)捨てがたき世かな(こんな所にも捨て難い女がいるとは矢張り都の華やぎだな)。かかるこそ、なかなか身も苦しけれ(これだから妻には気まずい女通いも止められない)」と思す(と光君は御思いに成ります)。「\*とりどりにすてがたきよかな」という言い方は、<都にいる多くの女は其々に趣が在って捨て難い>という光君の惚気気分を語ろうとして作者が、実はこの段の最初に思い付いていたのではないだろうか。そして恐らく其の枕として「とりどり」と駄洒落ては、歌人たる素養を働かせて万葉以来の一手法で有るらしいクイナという鳥を詠み込んだ歌の贈答場面を膨らませた、のだろう。こういう落語ないし講談調の語り口の文は既に他にも在ったし、惚気を陽気に見せる演出とも思える。

「おしなべて、たたく水鶏におどろかば、うはの空なる月もこそ入れ (和歌 14-10)

「見境なしの歓迎は、無用心にも程が有る (意識 14-10)

\*注に<源氏の返歌。花散里の「水鶏だに」「月を入れまし」を受けて「おしなべてたたく水鶏」「うはの空なる月もこそ入れ」と切り返す。>とある。花散里が「月」を<をとこ>に見立てたので、<浮ついた気持ちの>という間男の形容を「うはの空なる」と工夫した、と言う事に成るのだろう。逐語なら、「そんなにいつも、クイナが鳴く度に戸を開けたなら、どんな間男が入るか知れませんよ」ということで、良く出来た冗句である。

うしろめたう(心配ですね)」とは、なほ言に聞こえたまへど(などと光君は態と茶化して申し上げ為さったが)、あだあだしき筋など(花散里が他の男に心移りすることなどを)、疑はしき御心ばへにはあらず(疑ってのお気持ちからでは有りませんでした)。

年ごろ、待ち過ぐしきこえたまへるも(この不在の数年を待ち過ぐし申しなされた花散里を)、さらにおろかには思されざりけり(光君が疎略に御思いに為ることなど決して無かったのです)。「\*空な眺めそ(一時の不穏な雲行きなど心配するな)」と、頼めきこえたまひし折のことも(帰りを待つように光君が頼み申しなされた別れの時の歌も)、のたまひ出でて(花散里は思い出して口にされて)、\*「空な眺めそ」は注に<「須磨」巻(第一章第四段)で源氏が花散里に詠み贈った和歌の一部の語句。>とある。其の歌は「行きめぐり(雲行きは色々変わるが)つひにすむべき月影の(いつかは澄んで見える月影だから)しばし雲らむ(少し曇っているからといって)空な眺めそ(空模様を心配するな)」(和歌 12-06)で、今から三年前の三月に光君が須磨行きに別離に先立って返歌したものだが、其の時の花散里の贈歌も古歌を下敷きにして光君を「月」に見立てていた。

「などで、たぐひあらじと、いみじうものを思ひ沈みけむ(以前から言われた通りにしている

までで、帰京されてから直ぐお見えに成らない事を何も特別に気にして物思いに沈むような事は御座いません。憂き身からは(待つ身の上という事では)、同じ嘆かしさにこそ(同じ辛さで御座いますので)」とのたまへるも(と仰るのさえ)、おいらかにらうたげなり(ゆったりしていて可愛らしいものでした)。

例の(光君は例によって)、\*いづこの御言の葉にかあらむ(何処から湧き出る言葉なのでしょう)、尽きせずぞ語らひ慰めきこえたまふ(甘い誉め言葉を次から次と耳元に吹き掛けながら花散里を可愛がって御遣り為さったのです)。\*此れは光君の濡れ場の常套句だが、それだけに興に乗って事に及んだという描写だろうから、それなりに興味深い語り口とも思う。

## [第二段 筑紫の五節と朧月夜尚侍]

かやうのついでにも(また、院外の女という事では)、五節(ごせち、太宰の大貳の娘)を思し忘れず(をお忘れなさらず)、「また見てしがな(また会いたいものだが)」と、心にかけたまへれど(御思いでしたが)、いとかたきことにて(先方も要職に在る身分の邸で非常に警護が固いもので)、え紛れたまはず(とても忍びでお出掛けになる事など出来ませんでした)。

女、もの思ひ絶えぬを(五節は女心に光君を忘れられず浮かない気分で暮らしては)、親はよろづに思ひ言ふこともあれど(親が何かと心配して縁談を持ち掛けましたが)、\*世に経むことを思ひ絶えたり(世帯を構える事は遂に断念していました)。\*注に<「世」は結婚生活をいう>とある。「世にへむ」は<俗世に生きる>とも読めるので、この文は<出家を決意した>という事なのかとも思ったが、続く文に「さる人の後見にも」とあるところを見ると、此処では<相応の興入れを断念した>ということらしい。

心やすき(光君は忍び通いなどしなくても気兼ねなく女たちに会えるように)殿造りしては(二条院の東隣に新殿を御造りに為っては)、「かやうの人集へても(乙女子や花散里などを住ませた上に)、\*思ふさまにかしづきたまふべき人も出でものしたまはば(思い通りに養育なさる事が出来る御子を儲けなさら)ら、さる人の後見にも(その教育係としてでも才女の五節を宛がって住ませたい)」と思す(と御思いに為ります)。\*注に<諸説がある。『集成』の「思い通りに養育なさるべきお子でもお生れになったならば」は、第四子誕生を想定。『完訳』の「紫の上などの出産を想定。なお、宿曜とは矛盾。後の玉鬘の物語の構想と関係するか」「思いどおり養育しようとお思いになる子でもお生れになったら」は、玉鬘物語の構想を考える。『新大系』は「(明石姫君のように后がねではなく源氏の) 思い通りにかわいがることのできそうな子」と注す。>とある。何とも分かり難い文である。前後のつながりから意味を特定しようにも余りにも唐突で、また一般論としても意図が分からない。そもそも五節の君についての記述自体が今までに余りにも少なく、この人の登場はいつも唐突に感じられる。実は花散里の登場もかなり唐突だったし、六条御息所の登場は逆にまどろっこしいところもあったが、それらはそれなりに人物像が語られていて、仮に不明な文があっても紹介照合の仕様が有る。しかし五節には人物像が殆んど語られていない。したがって少し不明な文があると調べようが無いので、そのまま不明となる。未消化感が不快である。数段数帖の欠損欠落が強く疑わしい。

かの院の\*造りさま(東の院の造営ぶりは)、なかなか見どころ多く、今めいたり(新趣向でした)。よしある受領などを選びて(風流を心得た受領などを選んで)、当て当てに催したまふ(そうした

財界人たちに得意分野を割り当てて築造させなされたのです)。 \*「ひむがしのみん」の建築については、女たちの動静を絡めた独特な語り口に思えて印象的だ。

尚侍の君(\*ないしのかんのきみ、侍女長である右大臣家の六姫を)、なほえ思ひ放ちきこえたまはず(光君は今なお思い切り申しなさいませんでした)。 \*ローマ字で読みを確認した所、上記のように記されている。特に注は無いが此処の文だけは、どうやら漢字かな交じりでは同じ「尚侍の君」という表記が、かな原文では「かんのきみ」ではなく「ないしのかんのきみ」と省かずに表記されているらしい。

こりずまに立ち返り(不遇の契機ともなった事の露見を懲りもせず昔のように)、御心ばへもあれど(光君は御心を御示しなさることも有りましたが)、女は憂きに懲りたまひて(六姫は女心に朱雀院を思う辛い気持ちが一杯で懲りなされて)、昔のやうにもあひしらへきこえたまはず(昔のように光君に御応え申しなさる事はありませんでした)。なかなか、所狭う(光君は復権したものの内大臣という要職に就いて意外と窮屈で)、さうざうしう世の中、思さる(何処か物足りない都暮らしだと御思いに成りました)。

### [第三段 旧後宮の女性たちの動向]

院はのどやかに思しなりて(院は讓位なさって重責から放たれたので穏やかな気分になり御成りになって)、時々につけて、をかしき御遊びなど(四季折々に趣向有る音楽会などで)、好ましげにておはします(楽しそうに暮らしていらっしやいます)。女御、更衣、みな例のごと(妃たちは残らず御在位の時と同じように院の御側に仕えて)さぶらひたまへど(後宮から移って暮らして御出ででしたが)、

春宮の御母女御のみぞ(とうぐうのおんははにようごのみぞ、立太子なされた皇太子の母君である第一妃の承香殿女御だけは)、とり立てて時めきたまふこともなく(院の御在位中は格別の御寵愛を御受けなさらず)、尚侍の君の御おぼえにおし消たれたまへりしを(侍女長が院の最愛のお気に入りであったことに影も薄くていらしたが)、かく引き変へ、めでたき御幸ひにて(打って変わって皇太子の母御という御栄達で)、離れ出でて宮に添ひたてまつりたまへる(院から離れて御所内の東宮の御在所に御付き添い奉っていらっしやいます)。

この大臣の御宿直所は、昔の淑景舎なり(内大臣に御成りになった光君の御所内の私室は昔からの桐壺でした)。\*梨壺に春宮はおはしませば(南隣の梨壺が幼い皇太子の御所内の御部屋でしたので)、近隣の御心寄せに(ちかどなりのみこころよせに、隣同士の誼で)、何ごとも聞こえ通ひて(何かと親しく為さって)、宮をも後見たてまつりたまふ(光君はこの皇太子までお世話申し上げなさいます)。 \*「梨壺」は昭陽舎(せうやうさ)という後宮殿舎の通称である。此処の文のように部外者に窺い知れない事情の後宮の部屋名を何気なく使うというのは、如何にも宮廷内の読者向けの語り口のようなのだが、其れが却って、この物語を漏れ聞く後宮には出入りできない上流婦女子の憧れを弥増してそそったと言う面もあったのかもしれない。ところで当時の内裏図などによると、淑景舎(しげいさ)は御所の最奥で後宮北東隅にあるが、昭陽舎はその南隣の舎屋である。恐らくは好況を背景とした内裏の拡充であり、其れが女官の増員の為か他の用途なのかの具体的な事情は分からないが、昭陽舎と淑景舎だけが北舎という別棟を併設している親子棟という特殊仕立

てであり、装飾の程はともかくも容積は他の殿舎より図抜けて大きい。後宮の当初設計に照らせば、五舎は七殿より格式が低かったかもしれないが、西の三舎は帝の御座である清涼殿に最も近くて公式にも実用性が高く、東の昭陽舎と淑景舎の二舎は奥まっているという面は有るかも知れないが、大きくて実は裏手の門から外も近く、繁栄して手狭になって来た天皇家の御用向きを熟なすには私的には何かと実質的に使い勝手の良い部屋だったに違いない。でなければ源氏が愛用したり、東宮が使ったりする筈がない。桐壺更衣の段では、その格式の低さが強調されていたが、桐壺帝が勝手口から時代のダイナミズムを感じ取ったという要素は、やはり作者周辺の意図に有るのだろう。

入道後の宮(にふだうきさいのみや、帝の実母で有る尼宮は)、\*御位を(みくらみを、母后として祀り事に列席する為に)また改めたまふべきならねば(還俗なさる事は御出来に為らないので)、\*太上天皇に(だいじゃうてんわうに、名誉女帝に)なずらへて(準じる形で)、\*御封(みぶ、給付を)賜らせたまふ(御受けになりました)。 \*この母宮の処遇について注釈は<御子の冷泉帝が即位したので、その母である藤壺は皇太后になるのだが、出家の身なのでそうならず、太上天皇に准じて御封を賜る待遇を受けた。歴史上、一条天皇の母后藤原詮子が東三条院と呼ばれ、女院となった例を踏まえる。>としてある。権勢を振るう立場には就かないものの、社主として一角の寺院は構えた、ということだろうか。派手に振舞わず地味に暮らす事を旨とするという尼御の立場を尊重した処遇とはいえ、また本人が其の形を望んだものでは無いとしても、傍目には十分な栄達振りだろう。 \*「太上天皇」は<天皇の譲位後の尊称。太上天皇。上皇。>と大辞泉に有る。そして「上皇」が出家すると「法皇」と呼ばれる、との事。南北朝の混乱は策士策に溺れるの呈のようで、言葉本来の意味は実権は無いが手厚く身分保障した<名誉職>ということらしい。 \*「御封」は「封戸(ふご)」の尊称、との事。「封戸」は皇族などへの衣食住および使用人の面倒まで含む給付制度、との事。

院司ども(みんなのつかさども、女院の管理者たちも)なりて(朝廷の手配で高僧が務める事に為って)、さまことにいつくし(寺社は大変厳かでした)。御行なひ、功德のことを(朝夕の読経修行などの善行を積む事を)、常の御いとなみにておはします(尼宮は日課として御出でになりました)。年ごろ世に憚りて(この数年は時の朝廷に遠慮して)出で入りも難しく、見たてまつりたまはぬ嘆きを(御所への出入りも出来ずに尼宮は実子の皇太子であった帝に御会い申し上げ出来ない悲しみを)いぶせく思しけるに(遣り切れない思いで居らしたが)、思すさまにて、参りまかだたまふもいとめでたければ(皇太子が無事に即位なされた今となつては母御として思い通りに参内なさるのも大変に晴れがましいので)、

大后は(院の御母堂にして遂ぞ皇太子の廢位に失敗し、結局は光君の失脚も果たせなかった大后は)、「憂きものは世なりけり(つまらない世の中に成ったものよ)」と思し嘆く(と思ひ嘆いていらっしやいました)。大臣は(おとどは、しかし内大臣たる光君が)ことに触れて、いと恥づかしげに仕まつり(大后の御病状に応じて実に行き届いた手当てを御奉仕されて)、心寄せきこえたまふも、なかなかいとほしげなるを(御配慮申し上げなさるのも敵を庇うようで何とも奇妙なので)、人もやすからず、聞こえけり(世間は納得していないようでした)。

#### [第四段 冷泉帝後宮の入内争い]

\*兵部卿親王(ひやうぶきやうのみこ)、年ごろの御心ばへのつらく思はずにて(この数年の不遇時代に温かい思い遣りがなく)、ただ世の聞こえをのみ思し憚りたまひしことを(ただ朝廷の機嫌

ばかりを慮って冷たい態度を取って居らしたのを)、大臣は憂きものに思しておきて(内大臣の光君は恨んで御出で)、昔のやうにもむつびきこえたまはず(復権した今も昔のようには親しく申し上げなさいませんでした)。 \*注に<紫の君の父親。藤壺入道の宮の兄。皇族第一の実力者。>とある。今や帝の伯父宮でもあり王家血筋ではあるものの、権勢とは縁遠い生い立ちだった所為か胆力に乏しいらしく、意地が悪く紫君を蔑ろにしたと語られる恐妻が居る事も相まって、光君との因縁は複雑である。

なべての世には(光君は幅広い交友関係に於いて)、あまねくめでたき御心なれど(誰とも喜んで接して居らしたが)、この御あたりは、なかなか情けなき節も、うち交ぜたまふを(兵部卿親王に対してだけは時に冷たく御当たりなさるのを)、入道の宮は、いとほしう本意なきことに見たてまつりたまへり(尼宮はとても残念で望ましくない事と思い申し上げ為さっていました)。

世の中のこと、ただなかばを分けて(政治の差配を丁度二分して担いなさって)、太政大臣(おほきおとど)、この大臣の御まなり(岳父の首相と光君の御心のままでした)。権中納言の(岳父の嫡男である権中納言の)御女(おんむすめ、御息女が)、その年の八月に参らせたまふ(この年の八月に新帝の妃として後宮入りなさいました)。祖父殿(おほちどの、御息女からすれば祖父に当たる太政大臣が)みたちて(婚礼を執り仕切りなさって)、儀式などいとあらまほし(輿入れの儀式は如何にも盛大に行われたのです)。

兵部卿宮の中の君も(兵部卿宮に儲けの御息女も)、さやうに心ざして(入内を志して)かしづきたまふ名高きを(大事に御育てなさっていると宮廷内では評判が高かったのですが)、大臣は\*人よりまさりたまへとしも(光君は其の娘の入内を帝に推挙して妃という高貴な地位に適えなされば良いとは必ずしも)思さずなむありける(御思いでは無いようでした)。いかがしたまはむとすらむ(光君は如何為さるのでしょうか)。 \*「人より勝り給へ」については、注に<源氏の心中を間接的に叙述。『集成』は「すぐれたお身の上(帝の後)になられよともお考えにならないのだった」と注す。>とある。確かに既述の兵部卿宮との経緯を思えば、光君はとても素直に推薦する気には成れない、という文脈とは思う。しかし穿てば、妃たちの受精競争に勝って母後の地位を占める、という事が御息女に有れば良いとは光君は思っていない、という含みも感じられる。